

入選

コロナと闘うすべての人へ

東京都 由井中学校

二年 加賀山 夏実

2019年12月頃に始めて耳にした、「新型コロナウイルス感染症」がこんなにも流行するとは、そのときはまだ予想もしていなかった。

2020年3月、この頃から私は、コロナを間近に感じるようになった。前代未聞の全国の学校の臨時休校であった。それまでは、コロナをあまり認知しておらず、「中国のあたりではやっているのだろうか…」というくらいだったが、第一回目の緊急事態宣言が出た4月、一日の東京都のコロナの感染者は100人を超えていた。だが、それも今考えてみれば、人類とコロナの闘いの序章に過ぎなかった。今や、毎日の東京都の感染者は1,000人を超えるのがあたりまえだ。

でも、こんなにもコロナ感染者が増え、いつ誰がコロナに感染してもおかしくないこの状況で、日々闘ってくれている人がいる。

それは、医療従事者の方々だ。たとえコロナに感染しにくいような服装で、コロナ患者さんの措置に当たったとしても、100パーセントコロナに感染しないというわけでは絶対はないし、医療従事者の方でコロナに感染してしまった人もたくさんいる。それをわかっているけれど、人々を助けるためにコロナと闘ってくれている。

今こそ、全国の医療従事者の方々に感謝するべきだと私は思う。

私は、心から言いたい。「ありがとう」と。

新型コロナウイルスは、私たちの学校生活にも大きな影響を与えた。やはり、はじめにあげた臨時休校の影響は、非常に大きかった。

私は、夏休みよりもさらに長く学校に行かない期間を、このとき初めて体験した。ちょうど臨時休校期間に入った2020年3月、私は小学6年生で、小学校を卒業する少し前だった。テレビなどでは、コロナ禍での卒業式が多く取り上げられていた。

コロナ感染防止のため、ほとんどの学校が時間を本来より短縮しての卒業式で、中には中止になってしまった学校もあるそうだ。それでも私の学校は、卒業式ができることになった。もちろん時間は短縮して行われたが、卒業式ができたことが私は嬉しかった。

コロナだったけれど、いつもと同じように、その日だけは学校に登校でき、みんなで楽しく話したあの日が私は忘れられない。はじめ、臨時休校になったときは、せつかくの思い出作りができる3月になぜ？と、怒りの感情もあったが、あの休校期間があったからこそ、毎日学校に行けることのありがたさを感じることができたと思う。

コロナが教えてくれたこと。それは、医療従事者の方々の数え切れないほどの「ありがとう」の気持ちと、あたりまえのようなこの日々のありがたさ、だったと私は思う。

今も、コロナと戦ってくれている医療従事者の方々に、「ありがとう」の言葉を捧ぐ。